

呼吸機能検査とは

肺活量や普段の呼吸量、勢いよく息を吐き出した際の呼気の速さと量などから、肺の状態を調べる検査です。

呼吸機能検査で分かること

通常の検査では2種類の検査を行っており、主に以下の項目を測定しています。

1. 肺活量（肺に入る空気の数）

肺は風船のように息を吸い込むと膨らみますが、肺が硬くなると膨らみにくくなるため、吸い込むことのできる空気量が少なくなります。できる限り大きく吸って吐き出すことで、肺の容量を測定します。肺線維症などで低下します。

2. 一秒量（勢いよく息を吐き出すことのできる量）

気道（空気の通り道）がせまくなっていると、勢いよく吐き出すことができなくなります。その状態を1秒間にどれだけの量を吐いているかを測定します。ぜんそく、COPD（慢性閉塞性肺疾患）などで低下します。

*このどちらか片方が低下している、またはどちらも低下している、といった結果の組み合わせで、肺の病気を分類することができます。

その他、いろいろなガスを使ってさらに詳しく調べる精密検査や喘息の評価に用いられる可逆性試験なども行っています。

呼吸機能検査のあれこれ Q&A よくある質問にお答えします

Q：上手くできないのですが、私だけですか？

A：日常であまりしない口呼吸をお願いしておりますので、何度か検査を行うこともあります。担当技師が呼吸の声をかけて検査を行いますので、そのタイミングに合わせて出来る範囲で行っていただければ問題ありません。

Q：この前も同じ検査をしたが、またしないといけないのですか？

A：薬や治療の効果判定や、術後の評価のために何度も行う場合があります。詳しくは主治医にご相談ください。

Q：手術前ですが、特にせきが出たり、息苦しいわけでもないのになぜ、肺の検査をしないといけないのですか？

A：全身麻酔で手術を受けられる方には、ほぼ全員に検査を受けていただいています。肺に問題があると、麻酔をかける際の呼吸管理が変わってくるためです。

